私が思う真の平和

古堅小学校六年　仲田　琉依

「平和って何？、本当の平和って何だろう。」

この私の一言が、平和について考えるきっかけになりました。その何気ない一言に私の祖父は、こう答えたからです。

「平和？まぁ、一人一人ちがうと思うけど、やっぱり、国民一人一人が普通に暮らせる事なんじゃいの？」。

確かに祖父の言っている事は正しいです。

国民一人一人が普通に暮らせる。つまり安心して皆が笑い合える事は、とても大切であり、沖縄戦開戦当時五さいだった祖父には、とくに大切だったと言う事は分かりました。

けれど、戦争に勝ち、利益を得て、得られる「平和」もあるのではないかな？。"国民一人一人が普通の日常生活を得られる"ことが皆の思う「平和」であっても、本当はちがうのではないか？、、、。と、そう心のどこかで思っていました。

結局、「本当の平和」とは何だろうか？。そうずっと疑問をいだいていました。チビチリがマの話を聞くまでは、、、。

そのチビチリがマの話とは、今年の平和学習で私たち古堅小学校六年生がチビチリがマへ行った時に、ガイドの青山さんから聞いた話の事です。

青山さんは身ぶりを交えて話してくれました。

「このがマに約140名もの住民達がかくれていたんですよ。そして、そのおよそ六割に値する八十五名もの人達が、集団自決をと言う名の非業の死をとげていきました。」

チビチリがマの中は、とても蒸し暑く、せまくて、その場所に訪れ、話を聞いてからしか分からない。文面では、知り得ない様な事がたくさんありました。

これらの事から、私は「本当の平和」について改めて考えました。

一つ一つの尊い生命が犠牲になり、その上で得た「平和」などと真実の平和ではありませ

ん。だから私の祖父は「国民一人一人が普通に暮らせる事。」と言ったのだと思いました。

戦争の記憶が風化しつつある今。

私たち一人一人が「戦争」の事を知り、兵器のおそろしさに気づけたなら、命の尊さや自分が日々過ごす日常が恵まれている事に気づくことが出来たのなら。人種をこえ、宗教をこえ、国々の言葉をこえ、あらゆる利害をこえて。

かつて、米軍が上陸したこの読谷から「平和」を世界へ。「真の平和」を私は作る。